

小さな島に秘められた 大きな財産とは

エコツーリズム推進団体「隠岐自然村」の取り組み

島根県中ノ島 深谷 治

隠岐の 自然に魅せられて

隠岐島の自然は、とても複雑がゆえにたいへん面白いと思っています。生育する植物は、隠岐島の成り立ちに起因するさまざまな環境で育まれたものであり、大きく分けて大陸系、南方系、北方系に分類することができます。隠岐島が火山活動により離島として誕生してから約二万年。それまでは、大陸とつながっていたり、日本本土とつながっていたりした歴史があるようです。

その名残りで、本土ではあまり見られない大陸との共通種の植物を何種類も見ることができます。

代表的なものとしてオニヒョウタンボクやダルマガク、ヨコグラノキなどがそれにあたるといえます。一方、日本海を流れる対馬暖流と寒流であるリマン海流の影響により、暖地系の南方植物と寒地系の北方植物が当たり前のように同じ場所ですらんで分布している姿を見ることができます。同じ地域内で垂直分布による南方系、北方系植物の生育はさまざまな場所で見

ことができると思いますが、隠岐島のようにそれが平面上の同じ場所、しかも海岸線付近でも観察できる例は極めて特殊な例といえるのではないでしょう。例えば、エゾイタヤやヒロハゴマギとハマビワやコシヨウノキが並んでいたります。しかも、そこに大陸系植物が顔を見せてくれるのですから、植物に関心のある人なら非常に驚き喜ぶことでしょう。もちろん、オキノアザミやオキノアブラギクに代表される隠岐島の固有植物が数多く見られることも、隠岐を語るために重要

なポイントであると思います。

これらのことは植物分布の例ですが、他にも隠岐島の生物は本土ではみられない固有種である昆虫、両生類、哺乳類なども数多く確認されています。また、鳥類としては離島でしかその姿を見ることのできない環境省指定の絶滅危惧種であり、日本の天然記念物でもあるカラスバトが非常にたくさん生息しているのです。他にも、本土ではその姿をあまり見ることのできない大陸系の野鳥が頻繁に立ち寄ることも隠岐の特色であるといえます。

このように、隠岐島は他の地域とは差別化された興味深い自然豊富な離島としてかなりの魅力を持っているのです。しかし、これらのことが観光資源として注目されておらず、外部に向けての発信もほとんどされていません。人と島の現状であると感じています。人と自然とのかわりはさまざまな角度から見てゆくことができます。従来より地域で利用されてきた自然物、過去から習慣的に行われてきた行事、そして

日常的に島の住民が食べているもの、これら一つひとつが島の本当の魅力であると強く感じ、隠岐の自然を外に向けて発信し、島のすばらしさを島外人にもっと知ってもらうことが地域の活性化につながるのではないか。この島を訪れて感じたこれらの思いがエコツーリズムへの取り組みへの始まりだったのです。

エコツーリズムへの取り組み

私は、平成一〇年に家族四人で隠岐諸島のなかの海士町に移り住みました。最近海士町にはかなりのイターン者が増えてきているわけですが、私はそのはしりといったところででしょうか。この島に住むまでは、大手企業の社員として転勤で全国各地を転々としていました。しかし、企業の歯車として多忙な日々を追われる自分の生き方に疑問を持つようになり、一度しかない人生もっと自分らしい生き方をしてみたいとの思いで、自然が豊富な海士町へ思

い切って移住しました。

移住当初は林業の仕事に就きました。そこで会得した険しい山林に分け入っても怯むことなく行動できる技術で、常人では立ち入ることが困難な道のない藪地をラッセルして歩くこともさほど苦にならないようにもなりました。しばらく人が立ち入っていない無人島などの生物調査を行うためにも大変役立っています。

私は、自然愛好家からいわゆる“鳥屋”とよばれる人種であり、二〇年以上に渡り日本野鳥の会の会員として野鳥保護活動にも携わってきました。根っからの鳥好きであり、海士町に移住する前から離島の野鳥へ大きな関心を抱いていました。そして「類は友を呼ぶ」という諺どおり、移住して間もなく隠岐郡内で唯一の日本野鳥の会の会員であった浜中氏と親しくなり、二人で自然保護活動を開始することとなりました。「海士の自然を考える会」の誕生です。

まず、野鳥観察会などのフィールド

ワークを通して島の自然のすばらしさを住民に認識してもらおう活動を行いました。また、海士町のイベントなどで「海士の自然を考える会」のコーナーを設けてもらい展示物による啓発活動なども行ったりしました。私が移住するまではこのような自然を対象とした取り組みがされていなかったわけですから、我々の姿は島の住民の方には変わり者と映ったことでしょう。しかし、海士町の自然のなかには、島の人にとって身近すぎるがゆえに気づいていない地域の大きな資源が眠っていることや、なくしてはならない貴重な財産であることを知ってもらいたいという強い思いでした。

このような取り組みが隣の島にも聞こえていくようになったことで、同じような活動を行う自然愛好家の仲間との広域ネットワークができれば、平成一二年に隠岐郡一円を対象エリアとする「隠岐自然倶楽部」という名称の自然保護団体へと発展しました。現在、私が二代目代表となっております。

「隠岐自然倶楽部」の誕生は隠岐の自然保護に向けた大きな発展であったと確信しております。容易に会員が集まることができない、移動に費用と時間がかかるなど離島間での広域ネットワークの難しさもかなりありますが、行政からの助成金などにも助けられ、誕生して今年で六年目となりました。

平成一六年より近隣の島に住む「隠岐自然倶楽部」の仲間がエコツーリズムに対する取り組みを開始したことに影響を受け、自分も思いっきりエコツーリズムへの取り組みに人生をかけてみたいと思う気持ちがあふれ高まってゆきました。そして、平成一七年に林業の事業所を退職し、隠岐島の自然保護を根底に置いたエコツーリズム事業を開始することとなったわけです。

課題は 自然ガイドの養成

エコツーリズムという大きな概念のなかでまず開始したことは、自然ガイドへの取り組みです。以前より島根県

森林インストラクターや自然観察指導員の資格を受けていたこともあり、自分としてはいちばん取り組みやすい部分でした。しかし、実際は隠岐の自然が島外の人にほとんどアピールされていないこと、隠岐の自然は派手な目玉がないこともあり、観光事業としての自然ガイドは収益的にはかなり厳しいものがあります。もともと、島を訪れた人に本当の隠岐の魅力を知ってもらうためには欠かすことのできない重要な活動ではあると思います。草の根活動として来島者と一緒に自然のなかに歩き語ることの積み上げが、隠岐の自然の魅力を広めてゆくことになるかと信じています。

今、島の自然を案内できるガイドとなる人材育成が最重要課題となっております。仮に、どんどん島の自然を外部へ発信し、自然散策を希望する観光客が増えてきたとしても受け皿が整備されていなければ何なりません。今年度に入り行政を中心とした呼びかけで、ガイドブックには載っていない自然や



隠岐の固有植物オキノアブラギク。



エコツアーでガイドを務める深谷さん。



自然体験学習に参加した子どもたち。

「地域の食」を提案していくレストラン。



絶滅危惧種のカラスバト。



歴史など島の魅力を整理し伝えてゆけるガイド養成への取り組みが隠岐一円で開始されました。私も新たに自然体験を中心に行う「隠岐自然村」という名称のエコツーリズム推進団体を立ち上げ、その取り組みに協調しているところと

です。また「隠岐自然倶楽部」としても自然体験を行う観光客が増えていくことを想定して、自然に対するダメージを最小限に抑えることを目的とする「自然散策ガイドラインマニュアル」策定にも取り組み始めています。これは、「隠岐自然倶楽部」事務局長がかなり奮闘されているところです。

「地域の食」から伝えられること

自然体験と並行して取り組み始めたことに、「地域の食」へのこだわりがあります。移住してから今までの経験で、地元でもほとんど知られていない自然の食材が意外に豊富にあることを知り、これをエコツーリズムに利用しない手はないと思います。やはり

り誰もが「食」への関心はあり、一般的に最も親しみやすく納得しやすい分野でもあるでしょう。

「地域の食」の提案をしてゆくために、今年五月、「隠岐自然村」のメンバーでレストランをオープンしました。そこで、今まで地域であまり馴染みのなかった山野草や海藻を使った料理や、アケギミやガマズミ、イヌビワなど海士町の山で豊富に採取できる木の実に作った果実酒をお客さまに提供したり、また通常の料理の素材も地域野菜にこだわするなど、一つひとつの料理に海士町の自然が見える、つまり、食からの自然体験を提案しています。

他にも、アジやイカなどを使った海産物の燻製作りや、クロモジやおキタシノボボを使った薬草茶作りも行っています。これらは、まだまだ失敗の連続で試行錯誤段階ではありますが、とことん「地域の食」にこだわること、エコツーリズムへの切り口としてゆこうと思っています。

今、隠岐のエコツーリズムへの実践

は始まったばかりです。それゆえに、まだ手探り状態であり、どうすれば来島者の方たちに本当の隠岐の魅力を伝えることができるのか、結論を出すにはいたっておりません。しかし、自治体が財政難に陥った今、隠岐の活性化のためにはなくてはならない要素であると思っております。

日本海に浮かぶ小さな離島に秘められた大きな自然財産。他の地域との差別化が図られた自然体験。島を訪れる人たちに本当の隠岐を知ってもらうため、いま私にできることは「島を歩き、島を食べる」ことの提案なのです。

深谷 治 (ふかや はじめ)

昭和34年愛知県生まれ。大学文学部国文学科卒業。昭和56年大手自動車メーカーに入社。全国各地を転勤して松平成7年には島根営業所長として隠岐郡海士町へ家族4人でIターンする。現在は、宿泊、レストラン、自然体験などを総合的に運営する「隠岐自然村」の代表として島の活性化を目指す。植物学校として、研修生や動物学校で自然体験の非常勤講師を務める。また、同14年より空手教室を開き、島の子どもたちを指導している。